タイトル

ゴージャスお宝鑑定家～「う～ん、ゴージャス！」35

登場人物

・

剛田（ごうだ）：剛田質店の店主。ゴージャスな品物しか鑑定・買取しない。常に優雅で、クセが強い。口癖は「ゴージャス！」。

白金（しろがね）：剛田質店の見習い鑑定士。常識的で心配性。剛田に振り回されがち。

来客（若い女性）：サファイア製のアブローラーを持ち込む。

・

シーン1：剛田質店の朝

（剛田質店の豪華な店内。天井にはシャンデリア、棚には眩いばかりの宝飾品が並ぶ。白金が掃除をしている。）

白金：「（独り言で）これで最後かな…。ああ、剛田さんがもう少し普通の店主だったら…。」

（ドアベルが鳴り、剛田が颯爽と登場。マントを翻しながら。）

剛田：「おお、白金！朝から掃除とは感心だな。だがゴージャスたるもの、掃除にも優雅さを求めねばならんぞ。」

白金：「（ため息）おはようございます、剛田さん。」

剛田：「さあ、今日もゴージャスなお宝を迎え入れる準備は整っているかね？」

白金：「はい…多分。でも、普通の品物もたまには買取った方が経営的に…」

剛田：「フッ！ゴージャスたるもの、妥協は許されん！『優雅たれ』が我が信条だ。」

白金：「（心の声）また始まったよ…。」

シーン2：『サファイア製のアブローラー』登場

（ドアベルが鳴り、若い女性が入店。手には青い輝きを放つ物体。）

女性：「こんにちは。これ、鑑定していただけますか？」

白金：「（物体を見て）アブローラーですか？」

剛田：「ふむ…（物体を手に取る）これは…！」

白金：「剛田さん、まさか…」

剛田：「ゴージャス！これはただのアブローラーではない。サファイア製だ！」

白金：「ええっ！？サファイアでエクササイズするなんて…」

剛田：「運動ですら優雅にこなす。これぞ真のゴージャスたる証！」

女性：「父の遺品なんです。このサファイア製のアブローラーを使って筋トレをしていたんですけど、私にはちょっと合わなくて…。」

白金：「（驚き）お父様、随分と珍しい趣味をお持ちだったんですね…。」

剛田：「ふむ…（アブローラーをじっくり見つめながら）石言葉を知っているかね？」

白金：「え？石言葉ですか？」

剛田：「サファイアは誠実、知恵、そして不屈の精神を象徴する。これを使えば、体だけでなく心も鍛えられるということだ！」

女性：「（感動して）そんな深い意味があったんですね…！」

白金：「剛田さん、それ本当ですか？」

剛田：「もちろんだとも！ゴージャスな品には物語が宿るのだ。」

シーン3：実際にアブローラーを試す

（剛田がアブローラーを手に取り、店内のスペースを確保する。）

剛田：「白金よ、これを使った優雅なトレーニングを披露しよう。」

白金：「いや、そんな必要ないと思いますけど…。」

剛田：「黙りたまえ！ゴージャスたるもの、実践なくして何を語る！」

（剛田、アブローラーを使い始める。動作は驚くほど優雅で、まるでダンスのよう。）

（店内にはクラシック音楽が流れ始める。剛田がゆったりとアブローラーを転がし、戻すたびに「う～ん、ゴージャス！」と声を上げる。）

剛田：「見よ、この流れるようなフォーム！そして…」

（剛田の額に汗が滲む。その汗がライトに反射してキラキラ輝く。）

白金：「剛田さん…なんで汗までゴージャスなんですか！？輝きすぎて逆に怖いです！」

剛田：「フフ…ゴージャスたるもの、汗すら宝石のように美しくなるのだ。」

（音楽がクライマックスに達し、剛田がポーズを決める。女性客が拍手をする。）

女性：「すごい…父もこんな風にトレーニングしていたのかもしれません！」

白金：「いや、それはないと思いますけど…。」

（剛田、アブローラーをそっと置き直し、静かに息を整える。）

剛田：「さあ、これでこのアブローラーの本質を完全に理解した。次は価格を考える番だ。」

シーン4：金額発表

女性：「ところで、いくらで買取っていただけますか？」

剛田：「これほどの逸品、値を付けるのは容易ではない。しかし…ゴージャスの基準を満たすものとして、150万円と見た！」

白金：「150万円！？そんな高額でどうするんですか！」

剛田：「白金よ、ゴージャスに価値を問うなど野暮というものだ。」

女性：「本当ですか！？ありがとうございます！」

（女性が去った後、白金が頭を抱える。）

白金：「剛田さん、本当に大丈夫なんですか？」

剛田：「フッ、ゴージャスたるもの、後悔しない。それが真の美学だ！」

エピローグ：剛田の筋トレの結末

（夜、剛田が自宅の豪華なリビングでアブローラーを使ってトレーニングしている。）

剛田：「フッ…これでさらに優雅に磨きがかかる！」

（剛田がフォームを完璧に保ちながらトレーニングする様子をスローモーションで描写。汗が宝石のように輝き、音楽も壮大に流れる。）

（翌朝、質店にて。）

白金：「おはようございます…剛田さん！？なんですかそのぎこちない動きは！」

剛田：「白金ょ…筋肉痛もまた、優雅の証だ。」

白金：「もう…夜な夜な筋トレなんかするからですよ！ちゃんと仕事してください！」

剛田：「フフ…それもそうだな。さあ、今日もゴージャスに参ろう！」

（白金がため息をつき、剛田が気合を入れるところで幕を閉じる。）

終幕